Ⅴ　調査の成果

右京一条三坊八坪の検出遺構と出土遺物　遺構は、その重複関係や出土遺物より、奈良時代前半以前、奈良時代後半（西大寺創建段階）、平安時代以降の３時期に区分できる。

奈良時代前半の遺構は、建物や柱穴列、溝などで、いずれも、北で東に振れるという特徴をもつ。西大寺造営以前の当地の利用を考えるための資料となろう。

今回の調査における最大の成果は、奈良時代後半に造営された創建段階の西大寺食堂院の位置と建物配置の大半が明らかになったことにある。これまで食堂院の位置と建物配置は、「資財帳」の記載順序や、後世に描かれた古絵図などから復元されていたが、SB960やSB955など、「資財帳」の記載と規模の等しい建物遺構を検出したことで、当地が西大寺食堂院にあたること、食堂院の中軸上に食堂・殿・大炊殿などの主要堂舎が南北に並ぶことが判明した。さらに、覆屋をともなう巨大な井戸SE950や埋甕列SX930などの「資財帳」に記載のない遺構を検出し、西大寺食堂院に関する新たな知見を得ることができた。

SB960の東南で検出したSE950は、これまで平城京跡で検出された井戸の中で最大の平面規模をもつ。井戸枠の下３段は部材寸法も大きく、四隅の５枚組の組手も珍しい。また、部材の表面には加工痕や打刻印などが残り、古代の木材調達や木工技術を検討する上で重要な情報をもつ資料である。

井戸の埋土からは、多種多様な遺物が出土した。約360点の木簡は、内容･年代共に特徴的なもので、奈良時代後半の寺院経営の実態を示す資料として注目される。また、箸・杓子等の食事具、皿・椀などの食器、食物の残滓など、当時の寺院における食生活がうかがえる食堂院らしい遺物も数多く出土した。出土した土器の中には、墨書土器が多数含まれている。墨書の内容は、「西大寺」「西寺」などのほか、「西大寺弥」「薬□〔師カ〕」と記したものもあり、食堂院で用意された食物が専用の器で弥勒金堂・薬師金堂へ供されていた可能性が考えられる。また、「同」「同法」と記した墨書土器や木製品も出土した。元興寺03年調査においても「同法」と記された墨書土器が確認されているほか、近年その西側でおこなわれた調査でも「同法所」と記した墨書土器が出土している（㈶元興寺文化財研究所2007「平城京右京一条三坊一坪の調査　発掘調査現地説明会資料」）。食堂院東隣の坪が西大寺に関わる敷地である可能性が高まったといえよう。

SE950出土遺物は、その内容だけでなく、井戸枠使用木材の伐採年代である767年から、木簡の年代である延暦11年（792）頃までの約30年間という、具体的な使用年代が特定される一括資料としても評価できる。

調査区東南では埋甕列SX930を検出した。SX930は市15次調査で検出された遺構の南延長部分とみられ、両調査を合わせると南北に80基以上の甕を並べた施設として注目される。また、凝灰岩列SX935はSX930とほぼ同じ範囲で南北に並行していることから、両者は関連する遺構と考えられ、SX935を基壇状の整地の西辺外装とすると、その整地上に埋甕遺構が整然と並んでいた姿が考えられる。しかし、埋甕を覆う建物遺構は市15次調査に続いて今回の調査においても検出されず、仮に埋甕を覆う建物が存在しなかった場合、甕は露天に放置されていたこととなる。そのほかにも、SX935に対応する東辺外装にあたる遺構が検出されないこと、両遺構間に広がる東西約８mの空閑地の存在など、埋甕の機能や凝灰岩列との関係についてはなお課題を残す。また、埋甕内部には食品などの残存物は確認できなかったが、多量の製塩土器の存在や、木簡の記載内容を考慮すると、醤などの調味料を製造・貯蔵していた可能性が考えられよう。

調査区全域からは奈良三彩、白釉などの施釉陶器類が出土した。奈良時代の大規模寺院が所有していた陶器類の具体的な内容を示すものとして重要である。また、その種類が正倉院宝物と類似するという点も興味深い。これら一連の施釉陶器類が食堂院という場所に保管されていた可能性が高まったことも大きな成果である。仏具としての側面をもつ奈良三彩が食堂院で管理されていたことは、南都古代寺院の食堂院が単に食事を供する場ではなく、食事を通した修行行為の一端を担う場でもあったことを示すものといえよう。

西大寺食堂院の成立と終焉　西大寺の造営は、天平神護３年（767）年に造西大寺司が任命された後に本格化したと考えられる。SE950の井戸枠に用いられた木材には767年晩秋から768年早春の間に伐採されたものが含まれ、西大寺造営にともない新たに木材が調達された状況がうかがわれる。食堂院の造営は、出土した瓦の年代観より、東塔・西塔の造営時期とほぼ同じで、金堂院よりやや遅れた宝亀年間と考えられ、「資財帳」が記される宝亀11年（780）までには完成したとみられる。

一方、食堂院の廃絶の時期については慎重な検討を要する。SB960礎石抜取穴より９世紀半ばの遺物が出土していることや、SE950の埋土から出土した「延暦十一年」の木簡の存在より、殿・大炊殿・井戸などの西大寺食堂院の主要施設は、８世紀末から９世紀半ば頃までに廃絶したと考えられる。しかし、SX930の甕の底部から10世紀半ばの土器が出土したこと、食堂自体は応和２年（962）に大風で倒壊するまで存続したとみられることなどを考慮すると、僧の共食の場としての食堂院本来の機能はごく早い段階で失われるものの、貯蔵施設とみられる埋甕はその後も存続した可能性があり、食堂院の各施設の廃絶時期は、それぞれの機能によって異なっていたと考えられる。

それでは、殿・大炊殿・井戸などの廃絶の契機はどのように理解すべきか。残念ながら、この点を史料的に明確に裏付けることはできない。寺内の僧侶が一堂に会して食事を取ることがおこなわれなくなり、その空間としての食堂院が形骸化したというような寺院組織内部の要因とともに、寺院組織を越えた外的な影響、たとえば木簡の最新の年紀から２年後に訪れた延暦13年（794）の長岡京から平安京への遷都という、多分に政治的な要因をも考慮すべきかも知れない。平安京において西寺の造営が本格化するのは、弘仁・天長年間に入ってからであり、平安京の寺院と南都の寺院とは断絶の側面のみが強調されるが、今回の発掘調査で明らかになった長岡遷都以後の西大寺の動向は、単に西大寺一寺の趨勢のみならず、南都寺院の盛衰や平安仏教の形成、さらには長岡京の歴史的な位置付けの理解についても一石を投じるものとなろう。

その後の当地の利用実態を示す遺構は少ない。食堂院の各施設のうち、食堂は11世紀初めに弥勒金堂として機能していたらしく、倒壊後に再建されたようである。SB960やSX930の周辺で部分的に広がる包含層（暗灰色土）には10世紀半ばを下限とする遺物が含まれており、食堂の再建にともなう周辺の整地に関わると考えられる。しかし、食堂以外の建物は再建された様子はなく、遺構も境内の排水のために掘られた溝や、炉跡などが確認されるのみである。

右京一条三坊八坪の検出遺構と出土遺物　中区では一条北大路南側溝と考えられる東西溝SD985を検出した。南側溝の溝心はX＝－144,610.5付近となり、元興寺03年調査で検出された一条北大路南側溝の溝心より約３m北に位置する。今回北側溝は検出していないが、遺存地割からの推定位置や、遺構検出面とそれを覆う土の堆積状況が北区と中区に挟まれた現水路を境に南北で異なることなどを合わせると、北側溝は現水路直下に位置すると考えられる。この場合、一条北大路側溝心々間距離は約16m（54尺・45大尺）となる。

北区で検出したSD986は、ほぼ南北に通り、埋土の状況より一気に埋め立てられたとみられることから、何らかの区画にともなう溝と考えられる。埋土に含まれる遺物は奈良時代半ばを下限とするため、北辺三坊三坪は既に奈良時代前半には活発な土地利用がされていたようである。しかし、柱列の他に建物などの遺構は確認されず、利用の実態は不明である。北辺三坊三坪は、絵図等には西大寺の「修理所」と記されるが、今回の調査では西大寺寺地である確証は得られなかった。

おわりに　現在の西大寺は、近鉄線南側に概ね叡尊による復興後の姿をとどめるが、今回の調査では、広大な面積を占めた奈良時代の西大寺とその周辺の状況を解明する大きな成果を得た。奈良市教育委員会や㈶元興寺文化財研究所による調査成果と合わせて、西大寺創建期の遺構が良好な状態で地中に保存されていることが明確になってきたわけである。今後も地道な発掘調査を続けることによって、往時の西大寺の姿が一層明らかにされ、かつ適切な保存処置が講じられることを切に期待したい。